

〔博士論文概要〕

医療施設内の看護者と高齢患者に
おける会話ケアの実態と
その効果に関する研究

平成 28 年度

江藤祥恵

筑波大学大学院人間総合科学研究科

ヒューマン・ケア科学専攻

【高齢者に対する会話ケアの効果に関するシステマティック・レビュー(研究 1)】

1. 目的

高齢者を対象とした会話ケアに関する介入の方法とその成果及び課題を明らかにする。

2. 対象と方法

本研究における問いは「高齢者において会話を用いた看護介入は高齢者の身体・精神・認知機能に対して有用か」と定式化した。

1) キーワード

「高齢者(aged)」、「会話、対話(speech OR conversation OR talk OR dialog)、語り(narration)、ナラティブセラピー(narrative therapy)、言葉(統制語として言語)(language)、Narrative-Based Medicine OR Narrative Based Medicine」、「看護(nursing) OR ケア(care) OR キュア(cure)」、「高齢者看護(geriatric nursing)」、「効果(effect) OR 影響(influence)」、「精神療法(psychotherapy)」、「看護職 - 患者関係(nurse-patient relation)」

2) データベース

医学中央雑誌(以下、医中誌)、CiNii、科学研究費助成事業データベース(以下、KAKEN)、厚生労働科学研究成果データベース(MHLW GRANTS SYSTEM ; 以下、MGS)、PubMed と CINAHL を使用した。

3) 除外条件

会話を用いた介入に関する記述がない、会話の内容分析のみを行っている、高齢者以外を対象としている研究、事例検討とした。

3. 結果

抽出文献は医中誌 3 件、CiNii 1 件、KAKEN 0 件、MGS 1 件(CiNii と重複)、PubMed 2 件、CINAHL 0 件であった。

1) エビデンスレベル

Ⅱランダム化比較試験が 1 件、Ⅲ非ランダム化比較試験(準 RCT) が 2 件、前後比較研究(IVa に相当) が 3 件であった。

2) 研究参加者

高齢者の居住場所について、4 件は施設内、2 件が地域在住であった。

高齢者の疾患について、2 件は認知症もしくは認知機能障害のある者、1 件は認知症なしあるいは軽度で、半数に脳梗塞の既往がある者、1 件は統合失調症の高齢者が対象であり、その他 2 件は未記載であった。

3) 会話ケアの方法

回想法、Timeslips、レミニセンス、楽しい会話、対話と多様な方法が用いられていたが、いずれの方法においても高齢者が語るということが主軸であった。

4) 評価指標

主な評価指標は、回想法においては精神機能(POMS、Rosenberg の自尊尺度)、身体機能(KOMI モデル)、コミュニケーション能力(東大式観察評価実施スケール)であった。Timeslips においては、精神機能(CSDD、NPI-NH、OERS)、身体機能(CIRS、QOL-AD)、コミュニケーション能力(FACS)であった。レミニセンスにおいては精神機能(GDS、STS)であった。楽しい会話、対話においては自律神経(心拍数、交感神経指標(LF/HF)、副交感神経指標(HF)、総神経活動量(TP)、唾液アミラーゼ活性値)であった。

5) 介入の結果と効果量

回想法を実施した結果、自尊感情に対する効果が報告されていた。

Timeslips を実施した結果、OERS と FACS について有意差があり、それぞれ効果量中、小であった。レミニセンスにおいては有意な結果は得られなかった。

楽しい会話について、介入前後の比較で HF が有意に活発になっていた。対話について、有意な結果は得られなかったが、唾液アミラーゼ活性値の効果量は中、LF/HF、HF の効果量は小と算出された。

4. 考察・結論

- 1) 会話ケアは認知機能の低下した高齢者において、感情表出促進、コミュニケーション能力改善に有用である。BPSD 改善に活用できる可能性も示唆された。
- 2) 会話ケアは高齢患者に限らず看護者への影響も推測されるが、これを明らかにした研究はなく、会話ケアがもたらす高齢者と看護者間の相互作用についての調査が必要であると考えられた。
- 3) 科学的有用性について、質の高い研究の蓄積が課題であり、会話ケアの生理学的評価が課題となった。

【看護者と患者との会話ケアの実態調査(研究2)】

1. 目的

看護者の視点から会話ケアの実態を捉え、その構造と効果に関する要因を検討する。

2. 対象と方法

1) 対象

高齢化率の高い地域の基幹病院に勤務するすべての看護師、准看護師(572人)。

2) 方法：質問紙調査

(1) 看護者の特性：年齢、性別、取得資格、資格取得後の勤務年数、現在の所属病棟での勤務年数、役職、勤務形態、専門学歴、取得学位、多次元共感測定尺度日本語版(共感的配慮、視点取得、個人的苦悩、空想)、職務満足度修正版、健康関連 QOL を測定する SF-8™(PCS、MCS)。

(2) 会話に関する質問(13項目)、1日に患者と会話をする時間数。

3) 統計解析

(1) 因子分析

会話に関する質問について、因子分析(Varimax)を行った。各因子の妥当性の検討にクロンバック α 係数を求めた。

(2) 各因子と看護者の特性との関係

各因子の下位尺度得点平均値を参考に高群・低群、また得点の上位、下位 10人ずつを抽出し上位群・下位群の 2 群に分け、看護者の特性について比較を行った。 t 検定、Mann-Whitney の U 検定、 χ^2 検定を行った。有意水準は 5% とした。

(3) 事例検討

看護者の特性と会話ケアに関する認識について特徴的な 2 人について事例検討を行った。

3. 結果

有効回答者数は 122 人、平均年齢は 35.48 ± 10.34 歳、男性 23 人(18.9%)、女性 99 人(81.1%)であった。

1) 因子の解釈・命名

(1) 具体的な改善($\alpha = .793$)

看護者は会話により、患者の認知機能や抑うつ、寝つきについての改善などを認識していた。

(2) 問題解決($\alpha = .805$)

看護者は会話により、患者のストレスの軽減、満足感、問題の解決、行動変化を認識していた。

(3) 看護者の満足感($\alpha = .745$)

看護者は会話により、自身のストレスの軽減、満足感、話しやすい患者の存在を認識していた。

2) 各因子と看護者の特性との関係(高群と低群の比較)

(1) 具体的な改善

高群は女性の割合が高く($\chi^2(1, N = 122) = 8.979, p = .003$)、SF-8 のうち PCS が低かった($t(120) = 2.02, p = .026$)。

(2) 問題解決

高群は役職ありの看護者が多く($\chi^2(1, N = 122) = 8.456, p = .004$)、平均年齢が高く($t(120) = -3.262, p = .001$)、資格取得後勤務月数が長く($t(120) = -3.547, p = .001$)、教育年数が短かった($p = .004$)。

- (3) 看護者の満足感
高群は空想項目の平均値が有意に高かった($t(120) = -2.531, p = .013$)。
- 3) 各因子の特徴(上位群と下位群の比較)
 - (1) 具体的な改善
すべての項目で上位群と下位群の間に有意な差はみられなかった。
 - (2) 問題解決
上位群は年齢が高く($p = .011$)、資格取得後の勤務月数($p = .001$)と現在の所属病棟での勤務月数が長かった($p = .019$)。また視点取得の得点が高く($p = .029$)、MCSが高かった($p = .035$)。
 - (3) 看護者の満足感
上位群は、視点取得($p = .035$)、空想項目の得点が高かった($p = .035$)。
 - (4) 事例
看護者の満足感について、下位尺度得点の低かった A 氏、高かった B 氏を抽出した。A 氏は 52 歳、男性で、約 30 年の勤務経験があり副師長であった。PCS は 42.80、MCS は 23.40、職務満足度は 96 点であった。B 氏は 30 歳、女性で約 8 年の勤務経験があり役職はなかった。PCS は 47.45、MCS は 79.84、職務満足度は 192 点であった。

4. 考察・結論

- 1) 看護者は会話ケアに、患者の具体的な改善、問題解決、看護者の満足感を見出していた。
- 2) 看護者は、会話ケアについて患者の心身に効果があると実感しており、看護者と患者の日々の会話について、ケアとして注目する意義が見出された。
- 3) 会話ケアは患者の問題解決のために提供されており、看護者の特性として年齢や臨床経験を重ねていることや、共感性として相手の立場になり物事を考える傾向が関連していた。
- 4) 会話ケアは、看護者において精神的な満足感の効果があり、看護者の特性として患者の心理状態を正しく理解しようとする傾向が関連していた。
- 5) 看護者の満足感に注目すると、キャリアに相違がみられたことから、会話ケアが看護者の精神面や意欲に与える影響を探る必要性があると考えられた。

【看護者と高齢患者との会話ケアと看護者の特性との関連(研究 3)】

1. 目的

高齢患者との会話ケアについて、看護者のキャリア発達との関連性を非逐次モデルによって検討する。

2. 対象と方法

- 1) 対象 神奈川県 1 施設、栃木県 3 施設の 4 施設に勤務する看護者 961 人。
- 2) 方法：質問紙調査
 - (1) 看護者の特性：研究 2 の質問項目に加えて、勤務形態、取得学位、コミュニケーション研修受講の有無、高齢者との接触頻度、同居経験の有無。
 - (2) 会話に関する質問(39 項目)、1 日に高齢患者と会話をする時間数、1 回の会話の所要時間。
- 3) 統計解析
 - (1) 因子分析
研究 2 と同様に因子分析(Promax)を行った。
 - (2) 重回帰分析
各因子の下位尺度得点を従属変数、看護者の特性を独立変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。
 - (3) 共分散構造分析
AMOS を使用し、各因子と外在変数との関係性について重回帰分析の結果を参考にしながらモデルを検討した。

3. 結果

有効回答者数は 391 人、平均年齢は 33.43 ± 9.49 歳で、性別の内訳は男性 55 人(14.1%)、女性 336 人(85.9%)であった。高齢患者と会話をする時間は 1 回につき平均 9.76 ± 7.65 分、1 日に平均 2.59 ± 2.25 時間であった。

1) 因子の解釈・命名

- (1) 会話ケアの効果($\alpha = .900$)
看護者は会話ケアにより、高齢患者の睡眠や認知機能、抑うつなどに良い変化が生じていると実感していた。
- (2) 看護者の満足感($\alpha = .883$)
看護者は会話ケアにより、自らの精神的充足感を実感していた。
- (3) 高齢患者の満足感($\alpha = .762$)
看護者は会話ケアにより、高齢患者の精神的充足感を実感していた。
- (4) 看護ケアの波及効果($\alpha = .669$)
看護者は会話ケアにより、看護ケアや高齢患者を取り巻く医療者や家族へ影響を及ぼすと実感していた。
- (5) 高齢患者の語り($\alpha = .771$)
看護者は会話ケアの際に、高齢患者が昔の話をする人が多いと感じていた。

2) 各因子の独立変数との関連

- (1) 会話ケアの効果
重決定係数は $R^2 = .312(p < .001)$ 、有意な標準偏回帰係数は、年齢($\beta = .150, p < .001$)、看護者の満足感($\beta = .367, p < .001$)、高齢患者の満足感 ($\beta = .290, p < .001$)、高齢患者の語り ($\beta = -.103, p < .001$)であった。
- (2) 看護者の満足感
重決定係数 $R^2 = .470(p < .001)$ 、有意な標準偏回帰係数は、年齢($\beta = -.210, p < .001$)、共感的配慮($\beta = .274, p < .001$)、職務満足度($\beta = .158, p < .001$)、会話ケ

アの効果(第1因子) ($\beta = .280, p < .001$)、高齢患者の満足感($\beta = .184, p < .001$)、看護ケアの波及効果($\beta = .162, p < .001$)であった。

(3) 高齢患者の満足感

重決定係数は $R^2 = .330, (p < .001)$ 、有意な標準回帰係数は、性別($\beta = .084, p = .049$)、個人的苦悩($\beta = -.138, p = .001$)、会話ケアの効果($\beta = .301, p < .001$)、看護者の満足感($\beta = .219, p < .001$)、看護ケアの波及効果($\beta = .139, p = .003$)、高齢患者の語り($\beta = .153, p < .001$)であった。

(4) 看護ケアの波及効果

重決定係数は $R^2 = .308 (p < .001)$ 、有意な標準回帰係数は、最終学歴($\beta = .098, p = .027$)、資格取得後の勤務月数($\beta = .220, p < .001$)、視点取得($\beta = .201, p < .001$)、幼少期に高齢者から世話を受けた経験の有無($\beta = -.090, p = .039$)、職務満足度($\beta = .155, p = .001$)、看護者の満足感($\beta = .215, p < .001$)、高齢患者の満足感($\beta = .168, p = .001$)であった。

(5) 「高齢患者の語り」

重決定係数は $R^2 = .089 (p < .001)$ 、有意な標準回帰係数は、空想($\beta = .161, p = .001$)、会話総時間数($\beta = .135, p = .006$)、高齢患者の満足感($\beta = .184, p < .001$)であった。

3) 会話ケアモデルの検討

モデルの適合度は χ^2 値 = 40.533、 $p < .001$ 、GFI = .973、AGFI = .924、NFI = .908、CFI = .927、RMSEA = .088、AIC = 76.533 であった。医療施設内における高齢患者と看護者の会話ケアの構図が示され、高齢患者と看護者に対する 2 つの側面に効果があり、これらを看護者が実感すると高齢患者の満足感や医療者への波及効果に影響を及ぼしていた。会話ケアに影響を及ぼす看護者の特性は、年齢と職務満足度であった。看護者の年齢(若年者、年長者)について、会話ケアにより、若年者は自らの満足感を得る傾向にあり、年長者は自らの満足感よりも高齢患者に対する効果を実感する傾向であった。

4. 考察・結論

- 1) 高齢患者との会話ケアは、看護者の年齢による相違が見られた。
- 2) 若年者は会話ケアにより直接的な効果として自らの満足感を得る傾向にあり、高齢患者との関係性を重んじた実践であると捉えられた。
- 3) 年長者は会話ケアにより、高齢患者や他職種からの評価を経て間接的に自らの満足感を得る傾向にあり、臨床において職責を果たすことや成果を求められていると捉えられた。
- 4) 会話ケアに対する看護者の満足感とは、ストレスの軽減や仕事への意欲、人間性の回復などの項目で構成されており、看護者の意欲や会話ケアの質を高める重要な要因であると捉えられた。
- 5) 看護者は会話ケアの効果として、高齢患者の不眠や認知機能の改善を実感していたが、これについては今後、高齢患者に対する生理学的評価を加え、エビデンスを検討することが課題となった。
- 6) 看護者と高齢患者の会話に関する質問紙については、質問項目の妥当性を確保し一般化を目指すことが課題となった。